

〔実践報告〕 教員と保育士の養成における「サービス・
ラーニング」の試み

今 津 孝次郎
新 實 広 記
西 崎 有多子
柿 原 聖 治
伊 藤 龍 仁
白 井 克 尚

愛知東邦大学

〔実践報告〕 教員と保育士の養成における「サービス・ラーニング」の試み

今 津 孝次郎
新 實 広 記
西 崎 有多子
柿 原 聖 治
伊 藤 龍 仁
白 井 克 尚

―目次―

はじめに

1. 教員と保育士の養成にとって「サービス・ラーニング」がもつ意義
2. 名古屋市での実践的試み
3. 試行の成果と今後の課題

1. 教員と保育士の養成にとって「サービス・ラーニング」がもつ意義

(1) 「ボランティア」から「サービス・ラーニング」へ

「サービス・ラーニング」(Service Learning)とは1990年代後半のアメリカで生まれた新しい言葉で、おおよその意味は「地域諸機関での奉仕活動を通じた経験学習」である。多民族国家のアメリカらしく、コミュニティで自立した成員になることを目的として地域社会への参画による経験から学ぶという、青少年を対象とした「市民性」(citizenship)を育成する実践的方法である。それまでも重視されていたボランティア活動を取り込みながら、教育方法として洗練させていったものと言ってよい。今や全米の中等・高等教育で盛んにおこなわれている⁽¹⁾。

「経験学習」という特徴も、プラグマティズムに立脚するデューイ『経験と教育』⁽²⁾以来のアメリカらしい方法である。既成の知識体系を一方向的に伝達するのではなくて、青少年自身が実際の生活を送るなかで身近に経験したことを意識して対象化し、そこから新たな知識や課題を自ら導き出す独自の学習方法で、今日流に言えばアクティブ・ラーニングの典型的な一つの手法にほかならない。日本では2000年代以降、ボランティア活動の教育的側面を強調したいというねらいを込めて、このサービス・ラーニングという言葉が少しずつ使われるようになった。高校や大学での公民教育の一環としてであるが、本報告では、あくまで教員や保育者の養成での地域参加活動を対象にする。そうした視点からのサービス・ラーニングはまだ全国的に見ても珍しい。

2014年度に本学で従来からの保育者養成に加えて、小学校教員養成課程を導入して教育学部が

新たにスタートしたとき、私たちは本学部の特徴ある教育方法としてこの言葉をキーワードにしたいと考えた。日本でも大学生のボランティア活動は今や当たりまえの取り組みであり、特に教育系大学・学部では、地域の学校園（小学校・幼稚園・保育所・児童福祉施設等を含む総称）へ出向いて子どもたちと触れ合うボランティア活動も日常的になりつつある。ただ、「ボランティア」という用語には限界がある。それは高齢者福祉から障害者福祉さらには被災地支援など幅広い分野を含んでいるし、元来が「自発性」に基づく活動なので、学生全員が関心を向けるわけではない。それに、あくまで「地域社会への参画」であって、「学習」の意味合いはそれほど注目されない。この二点を克服するのがサービス・ラーニングだと考える。もちろん、学生を受け入れる学校園にとっては「ボランティア」の方が、経費の心配も要らないので都合がよいはずで、学校園は引き続き「学生ボランティア」と呼ぶだろうが、同じ諸活動について、私たちはその教育面に着目し、今後は「サービス・ラーニング」(SL)と別に呼ぶことにしたい。

(2) 「サービス・ラーニング」は「プレ教育（保育）実習」に相当

この10年ほどの間に子どもと保護者が大きく変わってきた、と教育現場でよく言われる。子どもがそれぞれ個性ある諸課題を抱えていて、その背後にいる保護者一人ひとりも同様に課題があるという状況にどう立ち向かうのが教員と保育士の養成にとって新たな重要課題である。かれらとどのように対人関係をもつことができるか、それができなければ肝心の授業も不成立となる。かつて求められていた「知力」以上に大切なのは「人間力」（対人関係能力、表現力、耐性、向上心、感性、倫理感）にほかならない。この人間力を培うには人間全体が問われるSLを大学入学直後から実践することがうってつけである。こうして、サービス・ラーニングはボランティア活動という性格をはるかに超えて、実習の準備段階としての「プレ保育・教育実習」として位置づけることができる。また、保育・教育実習をすべて終えた4年次に個人的におこなうサービス・ラーニングは「ポスト保育・教育実習」と捉えることもできよう。

(3) 大学4年間での「サービス・ラーニング」の位置づけ

また、昨今の人手を求める多忙な学校園から、有償のボランティア（またはアルバイト）求人も増えている。3～4年生になって、各種の正規実習を終えた後、園や施設から見込まれてアルバイトで手伝って欲しい（それが就職にも結びつく）と声かけられるケースもある。大学外での諸機関参加形態が多様化している今、SLはどのように位置づけられるであろうか。

学生自身が参加する主な目的について、「学習—非学習」と「無償—有償」の軸を分けてクロスさせると、図1-1ようになる。サービス・ラーニングはあくまで「学習」であり、無償と有償の場合を含む。学部（あるいは教育委員会が募集する学生ボランティア）

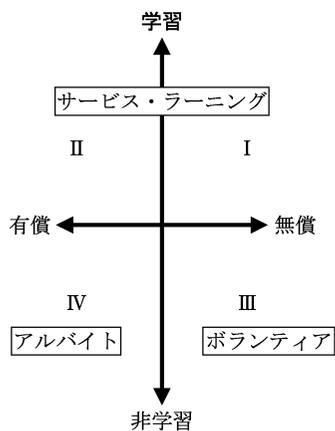


図1-1 学生の活動参加の主目的

としておこなう地域参加はⅠに当たり、個人ベースでおこなう場合はⅡが含まれることもある。そしてⅢは「ボランティア」、Ⅳは「アルバイト」に相当する。そうすると、大学1～2年次ではⅠが中心で、3～4年次になるとⅡが入ってくることになる。他方、ⅢとⅣは学生が個人的に自由におこなう活動というように区分できる。 (今津孝次郎)

2. 名古屋市での実践的試み

(1) 小学校

1) 名古屋市長A小学校におけるサービス・ラーニング

2014年4月の段階で、5月に運動会が行われる名東区内小学校の中で行事スタッフボランティアとして参加させて頂けることになった5校のうち、以下A小学校での実践について報告する。年間を通じて参加することになった学生5名は、学年全体へのボランティア（4月当初はそう呼んでいた）説明と参加者募集の際、たまたまA小学校を希望した学生たちである。調整役として年間を通じて西崎が担当した。

表2(1)－1 A小学校への訪問

	訪問日	目的	訪問者
1	5月22日	運動会ボランティア事前打合せ	学生5名、西崎
2	5月30日	前日打合せ	学生5名
3	5月31日	運動会	学生5名、今津
4	6月16日	今後の活動についての打合せ	学生2名、今津、西崎
5	9月20日	授業参観	学生5名
6	11月5～12日	作品展事前準備	学生5名
7	11月13・14日	作品展	学生5名、今津、新實、西崎

① 運動会

事前打合せでは、校長先生と教務主任から学生5名と筆者に対して、説明があった。詳細な資料（運動会プログラム、前日までの日程・練習等を含む運動会実施計画）が全員に配布され、学生に期待する内容として、器具の準備点検、グラウンドのトラック・児童席のライン引き、入退場門の設営・付近のロープ張り、テントの設営とテント内の机・いすの設営が示された。学生たちのためにも、当日だけでなく準備の段階から関わってもらいたいとのご配慮で、大学の授業時間割上可能な学生は、できるだけ練習や準備に参加することになった。また、運動会当日に教職員が着用する特注のオレンジ色のTシャツを作って頂けることになり、サイズの確認をした。

運動会当日は、5名の学生に加えて、今津教授も訪問し、学生の様子を観察した。運動会を終えた学生たちの感想の一部は、次のとおりであった。

- ・ 不安を抱えての初めてのボランティアであったが、連携が行き届いた先生方からの的確な指示により、迷うことなく作業を進めることができた。同時に、先生方が陰で子どもたちのこ

とを体調も含めて細やかに気遣い、競技が終わるたびに一緒に喜び励まし合う姿に感銘を受けた。

- ・校訓の「すすんでする子」のとおり、先生方の指示がなくても進んでできる子どもたちの姿と成長を感じた。先生という仕事には子どもが好きで忍耐力があることが必要だと実感した。

参加後、学生5名に各自参加させて頂いたことに対するお礼状を書くように筆者から指示し、書き方を説明した。初めて書くお礼状のため、下書きを提出させ、筆者が赤を入れて清書を再度提出させた。赤が入った下書きと清書のコピーを今後のためにファイルしておくように指示した。6月10日に筆者がまとめて校長先生へ郵送した。

② 今後の活動についての打合せ

運動会ボランティアを終了し、今後のボランティア活動のオファーを頂けるとのことで、学生代表2名、今津教授、筆者の4名で、打合せのためにA小学校を訪問した。2・3学期の行事の中から、9月20日(土)土曜参観日(授業観察)、11月13・14日作品展の準備、3月19日卒業式の準備が候補として挙げられ、個々の行事における活動内容の説明を受けた。

5月の運動会ボランティアについては、教職員の方々からの評価に加えて、保護者アンケートにもキビキビした学生の態度についての言及があったとのことだった。この結果を受けて、今後の活動も同じ5名で参加してもらいたいと要請された。学生たちと共に、嬉しく受け止めた。

③ 授業参観

9月20日、5名の学生たちは、それぞれ複数の授業を参観する機会を与えて頂いた。事前に大学から、新しく作成した「授業観察記録」用紙を数枚ずつ配布し、授業毎に記録を取り、終了後に筆者に提出するように伝えておいた。以下はその記録の一部からである。

- ・授業の最初に身近な題材で学ぶ空気を作り、積極的な参加を促し、色々な発見をする生徒に驚き、一緒に楽しみながら学ぶ教師の姿に共感。(5年の授業)
- ・うまく話せないが、元気で体全体で表現をする子どもとそれを優しく気遣う上級生、優しく丁寧に接する先生方とのお互いの信頼に基づく自然なやりとりで感動。(特別支援の授業)

授業参観終了後、学生たちは前回同様、お礼状を書いた。授業の起承転結、教師と子どもたちとのやりとりの方法や信頼関係、共に楽しむ姿等、それぞれの心に残ったことについて自分の言葉で述べた。筆者が提出された「授業観察記録」の一部と共にまとめて郵送した。

④ 作品展

事前準備期間 2014年11月5日(水)～11月12日(水)・事後撤収11月17日(月)のうち、都合がつけば参加してほしいと教務主任から依頼があり、午後3時以降で可能な学生たちが、平均5日間にわたって連日準備作業に参加した。3年に一度、体育館全体を美術館に見立てて行われる大規模な作品展ということで、事前に過去の作品展の写真を見せてもらっていたが、そのスケールは想像以上のものだった。以下は学生の感想の一部である。

- ・準備は黙々と行われるかと思っていたが、学年ごとに準備をしてはいるが、学年を超えてアドバイスを頂いたり、装飾や配置等について話し合いながら、常に手を動かしている先生方

の姿を見て、職場の人間関係の大切さにも気づいた。

- ・作品をとおして、子どもたちが一生懸命かつ楽しく作成している姿が一つ一つから見えるかのように感じた。指導の大切さも想像できた。
- ・自分の小学生時代を思い出し、とても懐かしい気持ちになると同時に、これからのA小学校の子どもたちの成長を益々見守りたいと思った。

作品展当日は学生たちに加えて、今津教授、新實助教（専門は美術）、筆者が訪問した。学生たちは、準備段階を経て、当日改めて作品展として子どもたちの作品を見て、先生方の展示の方法や周りのカラフルな装飾が作品を引き立てていることを実感したとのことであった。先生方の子どもたちへの思いも感じながら、細かな作業の工夫にも多くの学びがあったようである。

2) A小学校でのサービス・ラーニングを終えて

A小学校以外の小学校におけるサービス・ラーニングへの参加は、日程を重視して参加可能な学生が数名ずつ参加する形をとったが、A小学校へは、同小のご意向で、年間を通して同じ5名の学生のみが参加した。校長先生のリーダーシップの下、教職員の方々は入学間もない学生たちを温かく迎えて下さった。回を重ねるにつれて、学生たちは先生同士の協力体制の大切さにも身をもって気付くようになった。学生たちの間では、お互いに密に連絡を取り合い、調整もスムーズにできた。筆者とは、事前打ち合わせ、事後のお礼状の準備、「基礎演習Ⅰ・Ⅱ」の一環として行われた「報告会」の発表準備等で、研究室で数回集まって意見交換等ができた。初めての学校へ1回のみ訪問させて頂くことも、もちろん有意義ではあるが、同じ小学校に重ねて訪問させて頂くことは、先生方も顔なじみとなり、学生たちは気持ちの上でも安心感を得て、より積極的に関わることが可能になった。11月の作品展の感想の中にも、A小学校の子どもたちへの思いが感じられた。A小学校へのお礼状も回を重ねるにつれ、自らの振り返りができる余裕が生まれ、具体的な気付きや感想を含めたお礼状が各自で書けるようになり、明らかな成長が見て取れた。

今後への課題の一つは、大学の授業の合い間におけるサービス・ラーニングの時間の確保である。教育学部1年生は、幼児教育コースと初等教育コースに分かれている上、一部クラス指定をされる科目もあり、今回の5名の場合も時間割上の空き時間はそれぞれ異なっている。また、A小学校は大学と同区内とはいえ、徒歩で片道1時間弱かかる距離にあり、時間割上1コマ(90分)の空き時間内での訪問は不可能である。この問題は、他の訪問先についても同様であり、解決策として、まずは年度途中から大学によってサービス・ラーニングに参加する学生のための自転車教台が用意され、学生の申請により使用可能となった。また、次年度(2015年度)の時間割において、金曜日に参加しやすくなるように、配慮がされることとなった。

1年生の段階で、このように現場を見て、体験し、成長できた学生たちは、幸いである。大学の授業で問題意識を持って積極的に学び、更なるサービス・ラーニングを経験することは、今後経験する教育実習等への備えともなる。このスパイラルにより大学だけでは得られない経験を通して学生の確かな成長が期待できる。

(西崎有多子)

3) 授業参観

① 名東区内小学校の授業参観への参加

最近の教育方法学研究の分野では、「授業研究」における同僚との相互作用を通じた教師の専門性形成についての研究が進められている⁽³⁾。また、筆者の専門分野である社会科教育学研究に限っていえば、「サービス・ラーニング」は、主として「社会参加」を通じた「市民性(citizenship)」育成との関連で語られている⁽⁴⁾。

本節では、そのような「授業研究」と「サービス・ラーニング」を結びつけた、本学の子ども発達学科1年生基礎演習における教員と保育者の育成に関わる取り組みについて報告する。2014年度に発足した本学の教育学部の特色ある教育方法として、名東区内を中心に名古屋市内の小学校・幼稚園・保育所・児童福祉施設などの地域諸機関と連携したサービス・ラーニングに取り組んできた。そうした中で、名東区内の小学校において、「授業研究」とは行かないまでも、大学生にとって初めて授業を見る機会である「授業参観」に参加する機会を得た。そこで本節では、名東区内の小学校における授業参観を限定的な場面として絞り、参加した学生の変容を、「授業参観ノート」の記録やお礼状に書かれた感想記述等から追って論じていきたい。

② 学生の活動状況

本学科の1年生が、2014年度に、サービス・ラーニングとしての授業参観に参加した名東区内の小学校は、以下の4校である。A小学校・9月25日(金)2・3限(参加者9名)。B小学校・10月28日(火)2～4限(参加者5名)、C小学校・9月20日(土)1～3限(参加者5名)、D小学校・11月28日(金)2～3限(参加者2名)、参加学生は、初等教育コース(小学校教諭・幼稚園教諭希望)の学生と、幼児教育コース(保育士・幼稚園教諭希望)の学生とが混在しており、これまでにあまり接することが少なかった学生と、共に学び合う機会にもなった。学生は、各学校担当の大学教員から連絡を受け、「授業参観の心得」と「授業参観ノート」(『「サービス・ラーニング」ハンドブック』所収)を持参し、各小学校における授業参観に参加した。以下、B小学校の授業参観に参加した学生の中から、「授業参観ノート」の記録や「お礼状」に特徴的な記述が見られたある学生の事例を対象として取り上げる。そして、その学生の変容を追って検討することにより、サービス・ラーニングとしての授業参観の成果について考察する。

B小学校の授業参観は、保護者による授業参観日に当たる10月28日(火)の2～4限に行われた。校長による学校紹介の後、教務主任の引率のもとで全学級の授業参観を行った。教務主任からは、授業参観に参加する際の服装やマナーについて指導していただいた。参加学生は、いずれも初めての授業参観への参加であったが、あいさつやお礼をしっかりと行うなどの真剣な参加態度からは、貴重な体験となったことが窺われた。

授業参観を通じて、対象学生は、低学年担当の教師における指導のきめ細やかさに気づいた様子であった。「授業参観ノート」には、1年生の算数の授業における教師の指導に関して、「一つの質問に対して、手をあげている児童をすぐ当てるのではなく、少し時間を置いて、手をあげる人が増えてから当てるようにしていた」とあり、2年生の生活科の授業における教師の側の工夫

について、「発表することを手助けするように、一つのグループ8人くらいで、一人数十秒程度で、発表をさせるようにしていた」といったメモを残していた。こうした気づきは、これまで自身が置かれていた児童・生徒としての立場からだけでは見えてこない視点であり、教師として「自分だったらどうするか」と考えることにより、得られた視点であろう。

次に、対象学生は、中学年の授業参観を通じて、教師によって発達段階に応じた指導の工夫がなされていたことにも気づいた様子であった。「授業参観ノート」には、「3年生でも発表をさせる際には、紙をなるべく見ないように指導の工夫をしていた。先生は手伝いながら声をかけていた」「4年生にもなってくると一つひとつのことは、自分たちでやらせるようにしていた。もっとうまくの方が良いとのアドバイスを言っていた」といったメモを残していた。また、続けて参観した特別支援学級では、「一人ひとりにしっかり声をかけて、成功したら一緒に喜ぶなど、意欲が落ちないようにしていた」など、子どもの個性に応じた教師による支援のあり方についても、理解を深めていた。

そして、対象学生は、高学年の授業参観を通じて、教師の日常的な指導のあり方にも理解を深めたようであった。「授業参観ノート」からは、「5年生の算数の授業参観を通じて、「発言した人の意見に賛成だと思ったら手をチョキにして賛成ということを示していた」というハンドサインの活用に気づいたようであり、6年生の総合的な学習の時間を参観した際には、「先生が指示するのではなく、児童が授業の内容を決めて実行していたので、どんどん自立させていこうと考えているんだと思った」というような授業の背後にある教師のねらいにまで考えを及ぼしていたことがわかる。中でも、「分からない人は手をあげて、近くの子が教えてあげてという言葉がけは、すごいと思った」というように、児童同士の学び合いを支える教師の日常的な指導のあり方についても考えを深めていた。

なお、授業参観の後には、校長より、今年度の新任教員に対して行った講話をそのまましていただいた。校長の若手教員に対する期待の高さや、学校経営上のリーダーシップの強さを感じられた講話であった。最後に、対象学生は、その講話を聞きながら、授業参観全般を通じて感じたこととして、「授業参観ノート」の裏面に、次のようなメモ書きを残していた。

最初に、校長先生が、児童のことをあまり見るのではなく、教師がどう工夫しているかを見てほしいと言われた。低学年だと板書一つとっても文字の大きさや早さを工夫していた。6年生のあるクラスでは、わからない子に手を上げさせて、わかる子に教えてもらうようにしていた。難しいことだと思った。教師と子どもが同じ目線でしゃべっているときがあった。注意するときや怒るときは、上から言っても良いが、その後のケアが必要だと思った。学び合いや話し合いをやっている授業が増えているように感じた。校長先生が、一緒に学習する意味を理解してほしい、学校の意味を考えてほしいと言われたように、これから大事にしていくことは何かを考えたい。

(「授業参観ノート」裏面のメモ書きを一部修正)

このメモ書きからわかることは、これまで受ける側としてのみとらえていた授業について、教える側の観点から考えられるようになった視点の変化である。また、児童の発達段階に応じた指導が、教師によってなされていることに関して気づいた様子である。この事例のように、授業参観に参加した学生が、教師としての専門性に関するとても深い気づきをもったことがわかる。このような経験を大学1年生次から継続して積み重ねていくことは、教師・保育士としての資質形成の上で重要なことだと考える。

最後に学生はB小学校へのお礼状に、授業参観全体を振り返って、以下のような文章を綴った。

B小学校 校長先生

先日は、貴校の授業参観に、見学者として参加させて頂き、ありがとうございました。教師側の立場から、これまでの自分が思っていたものとは違う形で授業を見ることができ、とても貴重な体験になりました。校長先生が最初に、「教師がどのように工夫しているかを見てほしい」とおっしゃり、僕自身、授業参観に当たる気持ちが、随分変わりました。1年生から6年生までと、特別支援学級の授業を見学させてもらい、教師一人ひとりの授業のやりかたが全然違うことに気づきました。その学年にあった文字の大きさ、目線、質問内容、話し方、どれをとってもクラスをまとめるためや、授業に興味をもってもらえるようにと、試行錯誤を繰り返してきたのではないかと考えました。そして、一つの工夫を行うことは、単純には行かないと思いました。そのような工夫が、理科の実験や総合学習において、児童による自主的な学習につながり、教師の陰の苦勞によって、児童からの信頼を得ることができると思いました。全授業を見て、どのクラスも児童が集中しており、学習の雰囲気はとても良く、校長先生の教育方針が行き届いているのだなと思いました。今回、授業参観に参加させて頂き、教師がどのように児童に見られているかを考えて、工夫して授業を進めていくことは、とても大切だということを知ることができました。この経験をこれからの大学での学びに生かしていきたいと思いません。

(B小学校への「お礼状」を一部修正)

このお礼状からは、対象学生にとっての授業参観への参加が「教師側の立場から」授業を見るための契機となったことがわかる。そうしたことから教員・保育士をめぐす学生にとって、サービス・ラーニングとしての授業参観への参加が、有意義な経験になるということが確認できる。

③ サービス・ラーニングとしての授業参観の成果と課題

2014年度における本学科の1年生によるサービス・ラーニングとしての授業参観の成果は、以下の三点にあったと考えられる。第一に、これまで受ける側としてのみとらえていた授業について、教える側の観点から考えられるようになった点である。第二に、授業における教師の工夫といった視点から授業を見ることができるようになった点である。第三に、地域の小学校における授業参観に参加する態度として、最低限のマナーや礼儀を身に付けた点である。今後の課題は、

こうした地域の小学校と連携した学びを、大学1年生次から、いかに継続的に取り組ませていくかということである。 (白井 克尚)

(2) 幼稚園

1) 幼稚園におけるサービス・ラーニング概要

2014年度に、本学子ども発達学科1年生、3年生が名東区内の幼稚園で以下のサービス・ラーニングを実施した。実施の概要は以下の通りである。

表2(2)-1

連携幼稚園	参加学年・人数	実施内容・日時・場所・対象園児人数
A幼稚園	1年生・7名	遠足引率 日程：2014年10月21日(火) 9:00～13:00 場所：東山動物園 対象園児数：年長クラス68名
A幼稚園	1年生・8名	遠足引率 日程：2014年10月22日(水) 9:00～13:00 場所：東山動物園 対象園児数：年中クラス60名
A幼稚園	3年生・3名	遠足引率 日程：2014年10月23日(木) 9:00～13:00 場所：明德公園 対象園児数：年少クラス60名
A幼稚園	3年生・6名	造形ワークショップ 「巨大カラーバルーンで寒さを吹き飛ばせ！」 日程：2015年1月8日(木) 9:00～11:25 場所：A幼稚園 対象園児数：年長クラス68名
B幼稚園	1年生・9名 高校生・11名	造形ワークショップ「わくわく夢のまち」 日程：2015年3月10日(木) 9:00～11:25 場所：愛知東邦大学ラーニングコモンズ棟4A階 対象園児数：年少年長44人 年中34人 年少24人 計102名

2) 学生の活動状況

① A幼稚園遠足引率

A幼稚園遠足引率の当日は朝8:00に幼稚園に集合し9:35のバス出発まで園児と教室で絵本の読み聞かせを行った。これは、園児が学生になれるためでもあるが初めて幼稚園におけるサービス・ラーニングを経験する学生の緊張を和らげるために、幼稚園側が準備した配慮もあった。遠足の引率で学生に任された主な仕事内容は、バス乗車の補助、園児が迷子にならないように手をつなぎ園内をグループで散策、トイレの補助、昼食の補助であった。

遠足の引率を行った学生のサービス・ラーニング参加ノートには、保育者の側から見た保育活動で気づいたこととして以下の3つの点があげられていた。

一つ目は、先生の声かけの工夫である。例えば、園児たちに気をつけて欲しいことや注意する時は声を低く、楽しいことや明るい話は声を高く明るく出していた点。他には、園児に大切なことをたくさん伝える時に、話の途中で「まだ聞ける？」と声をかけたり、園児が集中できるように受け答えをしたりするような質問をしていた点があげられた。

二つ目は、教員同士のチームワークである。常に教員同士で他のグループの情報交換をしたり、園児の手が離れる合間を利用して次の行動の計画を再確認したり相談をしていた点である。

三つ目は、教員の園児に対する観察力である。少し疲れた子の様子やバスで少し体調が悪い子にすぐに気づき声をかけていた点である。

学生は、サービス・ラーニングを通して現場教員の「声かけの力」「チームワーク力」「観察力」を目の当たりにし、それぞれの3つの力の大切さを、体験を通して理解できたようだ。次に学生が園児たちの様子について気づいた印象的な点としては次のようなものがあげられていた。園児が予想以上に協力し合い、いろいろなことが自分でできたことである。例えば、園児たちが列から遅れたりした時にはお互いに注意し合い協力し合えることや片付けなどが自分でしっかりとできることに驚いたようだ。他には、自分でできることは「自分でできるよ」と自分の気持ちをしっかりと伝えられた点である。このようなことが遠足でできる理由として、出発の前の絵本の読み聞かせの時間に本や椅子を丁寧に片付けられる点や遠足終了の解散の時に、園児たちが次の日の持ち物を自分で親に伝える点など、自分でできることは自分でするような指導が日頃から園でされていることにも気づき、普段の生活の中での指導の大切さも知ることができたようだ。

② A幼稚園 造形ワークショップ「巨大カラーバルーンで寒さを吹き飛ばせ！」

巨大カラーバルーンとは、さまざまな色のビニール袋をテープで貼り合わせ、約5m×5mの巨大な袋を制作し、扇風機で空気を入れ膨らませ、子どもたちが袋の中に入って遊ぶものである。実施にあたって学生6名は、ワークショップの題材を話し合い、その後、そのねらいと活動計画をA幼稚園に訪問し教員の方々に説明を行った。学生は、実施日が冬休み明けの最初の週であることから園児たちが久しぶりに幼稚園にやってきて仲間と体全身を使って遊べるものを造形ワークショップのテーマに選び「巨大カラーバルーンで寒さを吹き飛ばせ！」というタイトルで実施することに至った。ワークショップ当日、学生は開始1時間前に集合し園庭で園児たちと外遊びを行いお互いの緊張を取り除くことから行った。ワークショップは、園児たちに活動の流れの説明から始め、グループごとの制作、園庭でのカラーバルーン遊び、片付けで終了した。ワークショップを終えて幼稚園教員から「改善点」、「良かった点」、「普段造形遊びで大切にしていること」などのアンケートを依頼し、学生はそのアンケート結果から以下のような気づきがあった。

教員からの改善点として多かった意見は声かけに関してであった。「作業や進行に気を取られ子どもへの声かけが少なかった。」などの回答に対して学生は「活動に期待をもてるような声掛けなどが必要だった。」「作業に気を取られ子どもたちと対話ができず子ども達の集中が切れてし

まっていた。」「どこまで大きくなるかな?など想像が膨らむような問いかけが必要だった。」と現場教員の園児たちへの声掛けと自らの声かけを振り返り学生は今後の課題に気づくことができた。

次に、良かった点として「普段では出来ない活動ができ、子ども達自ら貴重な経験をさせてもらえた。」「普段年長さん全員で同じ活動をする機会がないので、子ども達全員が入れる大きさで一気に遊べたのが良かった。」といった点があげられた。この回答に関して、学生は、テーマの通りに園児たちが体全身で遊べたことや、たくさんの園児が歓喜をあげて遊んでいた様子を振り返りながら、幼稚園教員のサポートがなければ園児をまとめることはできなかったなどワークショップ実施中の幼稚園教員のサポートや素早い対応力にも気づいたようだ。

「普段造形遊びで大切にしていること」に関しては、「声掛けや言葉掛け」「褒めること」「わかりやすい説明」「意欲を引き出すこと」「子どもたちの笑顔」があげられていた。学生は、この先生がたが造形遊びで大切にしていることを知ることで、自分たちの計画した活動を再確認するポイントにもなったようだ。このように、今後の課題が多く見つかる中で、ワークショップを通して園児たちの笑顔をたくさん見ることができたり、園側から「もう一度やって欲しい」との依頼もいただいたりして学生も少しずつ自信をつけることができたようだ。

③ B幼稚園 造形ワークショップ「わくわく夢のまち」

造形ワークショップ「わくわく夢のまち」は、B幼稚園の園児102名を対象に行った。会場は今年度12月にオープンした本学のラーニングコモンズ棟最上階で行った。最上階からは、B幼稚園の園児たちが住む名古屋市名東区の街が一望でき、園児たちの住む街を眺めながら将来の夢や住みたい家、町を空き箱や色画用紙、クレヨンなど様々な材料を使って夢のまちづくりを行った。また、ワークショップ会場では、「世界こども絵画展」と本大学に隣接する同学園の高校生企画による「未来の彫刻家たち展」が開催されていた。本ワークショップは、それら2つの展覧会を企画した大学生と高校生が中心となり造形ワークショップを行ったものである。

このワークショップに向け、学生はテーマを話し合い、実際に使用する材料を使って試作づくりを何度も行った。その中で、導入の方法や材料の適性、発達段階における作業の適性、作業スペースなどの環境構成なども学生同士で議論し準備を進めワークショップを実施した。

ワークショップを終えて学生はそれぞれの改善点を話し合った。その中で特に多かった意見は以下の3つである。一つ目は、「活動の流れ」についてである。事前に十分な準備をしたと思っていたが当日は想像していたように活動が進まず、戸惑う場面が多かったようだ。この原因として学生は、園児のさまざまな予期せぬ行動を経験したことがないために事前に準備する段階でいろいろな想定でシミュレーションができず、準備が不足していたことに気づいたようだ。また、事前に連携先の教員とも打ち合わせを何度も行い事前に客観的な意見を聞くべきだったなどの意見が出た。2つ目は「声かけ」である。園児にどのような声かけをして良いか迷うことが多かったようだが、園児の良いところを見つけ褒めながら会話を楽しんでいる幼稚園の先生の姿からかわり方を学ぶことができたようだ。3つ目は「チームワーク」である。準備にあたってメンバ

一で情報が共有できていなかったり、ワークショップのねらいがお互いに確認しあえないことがあったりしたようだ。ワークショップのメンバーでお互いを理解したり、相手に自分の思いを理解してもらったりすることの難しさを、準備を通して感じたようだ。

3) サービス・ラーニングとしての成果と課題

2014年度の幼稚園におけるサービス・ラーニングの成果は、以下の三点が特筆できると考えられる。第一に、教師のこどもに対する声かけや観察する力の大切さを、体験を通して理解することができた点である。第二に、子どもたちの行事を安全に行うためには、事前の入念な準備と計画が必要であることを準備する側の視点に立つことで体験ができた点である。第三に、サービス・ラーニングを受け入れる幼稚園側がこの活動に理解いただき一時的なイベントではなく継続的に保育者を養成していこうと幼稚園側も教育活動として位置づけていただけたことである。

学生が将来保育者になり、質の高い保育活動を現場で行うためには、養成段階で不安を克服し、実践力を自ら育てていくことができる力を育成することが重要である。そのためには、サービス・ラーニングを活用した教育を取り入れ、現場教員の声掛けの方法や子どもに対する観察力、教員同士のチームワークの重要性を、体験を通して理解し学ぶことがより効果的であると筆者は、参加した学生の声から確信できた。

また、今回は、1年生と3年生が幼稚園とのサービス・ラーニングを行ったが、その目的は、学年によって異なることがわかった。教育実習の経験がない1年次におけるサービス・ラーニングでは、期間の長い幼稚園教育実習とは異なり短期間で行われるため、プレ教育実習の位置づけで不安を克服することにつながる利点がある。さらに、大学の机上の学びだけでなんとか現場で対応できると考えている学生が現場に行くことで、指導案通りに活動が進まず失敗することが養成段階の早い時期に体験できることは重要である。幼稚園教育実習を終えた3年生がサービス・ラーニングを行うことは、実習先とは異なる幼稚園でそれまでに学んだ保育知識や技術、考え方を基本にしながら、各保育現場での異なる環境や子どもたちの実態に踏まえて工夫しながら子どもを援助することの重要性を学ぶことができる。

今後の課題として、サービス・ラーニングが保育実践力の身についた学生を現場に派遣し成功体験を得ることで自信を付けさせることが目的ではなく、どちらかと言えば自分の課題を見つけるために行うことの意義の方が大きい。そのためには、地域の方々にサービス・ラーニングの試みをご理解いただき連携して頂ける幼稚園を大学周辺の地域に増やし教育環境を整えていくことが筆者の課題である。また、サービス・ラーニングに一部の学生だけが積極的に取り組むのではなく、多くの学生がその意義を理解し主体的に継続してサービス・ラーニングに取り組めるようなカリキュラムデザインを幼稚園と連携して進めていくことも課題である。 (新實広記)

(3) 保育所

保育所でのサービス・ラーニングの実践として以下の二つを取り上げる。

1) 名東区内保育所子育て支援ネットワーク「ミニひろば」のお手伝い

名東区役所区民福祉部民生子ども課から本学へ、2014年9月10日開催の区内保育所子育て支援

ネットワークふれあい「ミニひろば」の会場使用の依頼が届いた。「ミニひろば」は名東区役所民生子ども課がバックアップする区内保育所子育て支援ネットワークの取り組みで、年間8回ほど区内各地域の保育所グループが持ち回りで開催しているものである。名東区の北西部には適当な大きさの会場が無いので、9月と翌年2月の例会分について本学を会場に使わせてほしい、ついでには学生ボランティアもお願いできればありがたい、という要請であった。

教育学部としても地域貢献の一環として全面的に協力することになり、大学事務局とも打ち合わせながら、会場（B001）を無償提供した。当日は3歳未満の乳幼児とその母親50組計100人が集い、賑やかな集会となった。9月はまだ夏休み中ということで、学生ボランティア募集は難しかったが、3年生を中心に5人の学生が集まった。

大学入口から会場への誘導に始まり、ベビーカーや自転車の整理整頓、受付支援、ひろば準備など、10時の開始まで40分ほどの間に多くの仕事があって、担当保育士だけでは手が足りず、学生ボランティアが不可欠である。「ミニひろば」の出し物は担当保育所で事前に計画されたもので、参加学生はベテラン保育士の歌やパネルシアターを実際に見る機会に恵まれた。出し物は1時間余りで終わり、会場後片付け後には保育士全員の反省会に学生も参加することができた。

学生にとって今回の参加の意義は以下の四つにまとめられる。そのすべてが保育実習での経験を超える内容である。

①保育所の子育て支援行事の実際をつぶさに見学することにより、保育実習で経験するような保育所内部ではなく、地域全体の保育所ネットワークの活動の存在を実地に知ったこと。

②保育の仕組みそのものについては大学での授業や保育実習で学んでも、近年関心が高まっている「子育て支援」にまでは目が届きにくいだけに、その実際を経験できたこと。

③保育実習で中心となる保育士と子どもとの関係よりも、「母親と子どもとの関わり」を身近に経験できたこと。

④さまざまな保育所の多様な保育士の活動をつぶさに見ることができたこと。

さて、2015年2月13日の「ミニひろば」当日は小雪が舞う寒い日で、出足が心配されたが、多くの母親が楽しみにしている行事のせいも、予定された数に近い参加があった。後期授業が終わったので、学生ボランティアも1年生を中心に16名もの参加を得た。天候が悪いのでベビーカーの数が少なく、バスやタクシーでの来学が1時間以上続いたので、小雪のなかを駆けつける赤ん坊を抱いた母親を会場へ誘導するのが学生たちの重要な仕事となった。

この日は、母親は隣の会場（B002）で講師による講演「子どもの心を育てる」を受講したので、その間の託児が担当保育士と学生ボランティアの任務になった。そこで、2月の「ミニひろば」では上記の四点に加えて、次の5点目が付け加わった。

⑤学生は3歳児未満の子どもと関わる機会が少ないだけに、乳幼児と直接触れ合うのが得難い経験となったこと。しかも託児会場（B001）では母親と離れて泣き出す子どもが続出し、そうした乳幼児の自然な様子について学生は戸惑いながらも実際に経験したこと。

2) 名古屋市A保育所「夏まつり」の支援

さて、2013年度より今津担当の専門演習（Ⅰ～Ⅳ）では、統一テーマとして「多文化保育」を掲げている。昨今のグローバル化の下で、多くの外国人が来日し、長期にわたって居住する実態が日常化している。特に愛知県では、南米系を中心に定住する外国人数が全国の中でも上位を占めており、その子どもたちが保育所や幼稚園に通っている実態をもはや無視できない。

「多文化保育」とは、外国籍の場合だけでなく、日本国籍であったとしても国際結婚で文化を異にする母親に育てられた場合や、長期間海外で暮らしたために海外の異文化を身に付けている場合も含めて「外国につながる子ども」の保育を対象にする。同時に、かれらと日本の子どもたちの交流の実態やそのあり方を対象にする。いずれもこれまでの保育では扱ってこなかった領域だけに、新たに検討すべき喫緊の課題である。

演習では近年多数出されている関連文献や諸資料の読み合わせをするが、それだけでは現実を理解できないので、名古屋市内で外国人園児が8割を占める保育所へ訪問して園内を見学し、園長のお話をうかがうというフィールドワークを何度か実施している。その訪問のなかで、園長から7月の「夏祭り」を手伝ってほしいと要請を受けた。この要請を授業で紹介したところ、専門演習の3年生3人と、教職科目を受講していた1年生2人の計5名が参加した。

「夏祭り」は園児と保護者など国際色豊かな人々が園庭一杯に集い、名古屋市最大の外国人集住地域ならではのイベントで、日本的な盆踊りのスタイルから始まり、途中からブラジルのカーニバル的なスタイルに変化するというユニークな祭りである。小さな出店も多いので、スタッフ数はいくらあっても足りない。他大学の学生も数名参加しており、学生ボランティアを抜きにして運営は出来ないことが分かる。本学の学生は子どもたちへのプレゼントを手渡すコーナーの役割が与えられた。この「夏まつり」に学生が参加する意義は以下のようにまとめられる。

- ① 保育所の主要行事を見る貴重な機会を得た。
- ② 国際化する地域社会のなかの保育所の現実を経験できた。
- ③ 日本人と外国人園児との触れ合いを通して、「多文化保育」を身近に考える必要性を感じた。
- ④ 園の保育士がこの「夏まつり」に向けてどれだけ準備を積み上げてきたか、当日もどれだけ細かく動き廻っているか、保育士の実際の職務の一端を間近に観察することができた。

保育所の主要行事に学生ボランティアへのニーズがある以上、積極的に参加していけば、保育実習では得られない経験を味わうことができ、地域のなかの保育所の位置について、改めて認識が深まるだろう。

(今津孝次郎)

(4) 児童厚生施設等

1) 保育士養成とサービス・ラーニング

本学の子ども発達学科では、複数の近隣小学校における運動会等学校行事への支援を柱とするサービス・ラーニングの試みが、2014年5月から本格的に始まった。これは元々、主に小学校教諭1級免許と幼稚園教諭1級免許の取得を目指す本学科初等教育コースの学生を想定⁽⁵⁾し、3年次からの教育実習を補うプレ教育実習と位置づけられて導入が図られたプログラムである。

一方で、本学科には小学校の教員免許ではなく保育士資格の取得を目指す幼児教育コースの学生たちが約8割存在している。これらの学生にとり、小学校という教育現場はあくまで教育機関であり、学校教育と保育やソーシャルワークは似て非なるものでもある。

保育士は児童福祉法に規定された0歳から17歳までの子ども（児童）と保護者の子育てを支援する専門職とされる国家資格であり、想定される職場は主に児童福祉法上の施設や事業所だろう。代表的な保育所以外にも児童養護施設など8種類18形態⁽⁶⁾の児童福祉施設には保育士の配置が義務付けられて児童福祉の現場を支えている。さらに、2015年度からの子ども子育て支援新制度に合わせて創設された小規模保育事業などの保育新事業や、社会的養護分野における児童自立生活支援事業や小規模住居型児童養育事業などにおいても保育士が果たす役割は大きい。

このように多様化する保育・福祉現場に対応する保育者の養成は養成校側の課題にもなっており、各校はそれぞれ工夫してプログラムを開発・導入し始めている。例えば、近隣の名古屋短期大学等5大学などは「基幹保育者養成プログラム開発のための共同教育事業」⁽⁷⁾に取り組み、中部学院大学短期大学部は「あそびすと」という独自のコンセプトに基づく養成プログラム⁽⁸⁾を開発している。また、日本福祉大学では社会福祉学部サービス・ラーニングセンターを設置してサービス・ラーニングに取り組んでいる⁽⁹⁾。

2) プレ保育実習としての位置づけ

本学科で保育士資格取得を目指す学生は、2年次に全員が保育実習ⅠAとⅠBの実習を行い、3年次には保育実習ⅡまたはⅢのどちらかの実習を選択することが予定されている。このうち、保育実習ⅠAとⅡが保育所における実習であり、保育実習ⅠBとⅢが保育所以外の児童福祉施設等における実習となる。

しかし、これまでの保育実習においては保育者に求められる基本的な社会性や資質などに課題が多く、その結果として受け入れ施設による評価が低いケースも珍しくなかった。このように、本学科で2年次12月から始まる保育実習までの期間に取り組んでいる事前指等の学内授業科目だけでは準備が間に合っていない現状は明らかである。

さらに、初めての施設実習となる保育実習ⅠBにおいては、①保育所以外の施設を見たり関わった経験の無い学生が大半である、②就職先として意識する学生が少ない、③宿泊を伴う実習形態に対する抵抗がある、などの独自の課題が加わることになる。

このように、これらの課題を克服するためには事前指導のあり方全体を見直す必要があることはいうまでもないが、保育実習までの約1年半の期間に取り組ませる保育・児童福祉現場におけるサービス・ラーニングをプレ保育実習と位置づけ、事前指導を組み立て直すことは可能であろう。そこで、保育士養成科目の担当者でもある筆者は、主に幼児教育コースの学生たちを対象とする保育者養成に直結するサービス・ラーニングプログラムの開発を検討した。そして、保育所以外の児童福祉施設の中から児童館に焦点を当て、実施に向けての可否を検討した。

3) 受け入れ先としての児童館

児童厚生施設と位置づけられている児童館は、児童健全育成を担う児童福祉施設である（児福

法40条)。今日の児童館は、0歳児から高校生まで幅広い年齢の児童と保護者が利用しており、多様な形態がある。また児童館は、地域の親子を対象とする直接利用型施設であり、保育所のよりに担当がいるわけではない。不特定多数の子どもたちが任意で来所し、あそび場として利用しており「あそびを指導するもの（保育士・児童厚生員等）」と規定される数名の職員が施設の運営管理や利用者への対応を行っている。このような児童館は、子ども時代に関わった経験を持つ学生も多く、保育所を除けば最も身近な児童福祉施設としてイメージも持ちやすい。

現在、名古屋市内には17の児童館が設置・運営されており、様々な活動が展開されている。その活動の一つには「ボランティアの育成・支援」もあり、児童館側のニーズや受け入れ態勢も整っており、すでに他大学と連携して学生を受け入れている実績もある。このように、児童館は学生を受け入れて活動しやすい条件を備え、本学科の学生が幅広い年齢の児童や保護者と関わる機会を得ることができるフィールドとして最適である。そこで、今年度は本学近隣のA児童館を中心に、市内3館の児童館におけるプログラムを企画した。

4) プログラムの実施方法

すでに他大学が連携していることから、本学が新たに児童館と連携を図ることは容易であった。そこで、本学科の保育士養成課程委員会に所属する筆者を本プログラムの担当教員として、対象施設との連絡調整を行った。また、児童厚生施設等を対象とする本プログラムも他のサービス・ラーニングプログラム同様に基礎演習の授業内容と位置づけ、授業時間等を活用して学生を募集して参加学生の組織化と事前・事後指導を実施した。

具体的には、5月21日(水)2限目に予定されている基礎演習Ⅰの授業時間の30分程度を使い、子ども発達学科1年生全員に対して本プログラムの概要を紹介し、その上で希望学生を募集して担当教員が参加学生全員に対してガイダンスを実施した。

学生は、参加を希望する活動が確定した後に「自主実習届」をゼミ教員に提出して個別指導を受け、捺印を得た上で教務課に提出することにした。また、受け入れ先から示された活動毎にグループのリーダーを配置し、必要に応じて対象施設と連絡を取らせ、当日はリーダーを中心にメンバーそれぞれの自己責任で活動を行った。また、3児童館の活動中には必要に応じて担当教員が訪問指導を行うようにした。そして、活動実施後に学生は担当教員に報告書を提出し、グループのリーダーが基礎演習の報告会で活動内容や課題についての報告を行った。

その他、関連施設等からのボランティア要請に対しては担当教員が対応を行った。また、本プログラムに関して必要な事項については保育士養成課程委員会で協議して対応した。

5) 2014年度活動実績

学生は6月以降順次活動を開始した。その経過は、当初1年生を対象として始まったにも関わらず学科上級生の2年生から4年生までの参加者があり、当初想定した参加対象よりも幅広い参加につながった点の特徴である。その中で、積極的に多数回の参加を継続した学生がいた一方で、ガイダンス当初に活動への参加を希望したにも関わらず不参加の学生や単発的な参加に終わった学生がいた点があげられる。その背景には受け身的な姿勢から抜け出せない学生の参加姿勢に問

題があるのではないかと推察される。

本プログラムにおける2014年度の対象施設と活動実績は、以下にまとめた通りである。

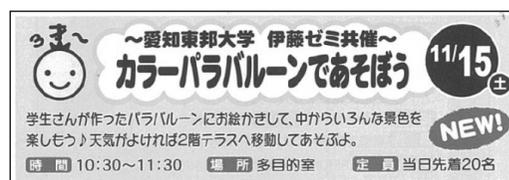
表 2 (4) - 1 対象施設と活動実績

名 称	特徴・連携実績	参加者数	実 施 内 容
A児童館	・本学から徒歩圏内 ・他大学との連携あり	計42名 U.S. ⁽¹⁰⁾ 1名	・平日午後の自由あそびボランティア ・子育て支援クラブ等への参加 ・児童館主催行事の手伝い
B児童館	・隣接区だが徒歩圏外 ・他大学との連携あり	計3名	・児童館主催行事の手伝い ・平日午後の自由あそびボランティア
C児童館 (大型児童センター)	・広大な敷地と多彩な企画 ・休日には2万人の利用有 ・他大学との連携あり	計9名	・専門ゼミ3年生による共催企画の実施 ・こどもランド主催秋まつりのスタッフ
名古屋市障害者 スポーツセンター	・障害者のための公的団体 ・他大学との連携あり	計2名	・センター主催納涼祭のスタッフ

6) 児童厚生施設におけるサービス・ラーニングの成果

本分野における2014年度の活動状況の中で最も組織的に取り組まれた活動は、筆者の指導する専門演習Ⅰの3年生ゼミがC児童館との共催企画として11月に取り組んだ「カラーバルーンであそぼう」というあそびのワークショップである。そこで、この取り組みにから得られた児童厚生施設におけるサービス・ラーニングを通じた学生の学びの成果について、不十分ではあるが触れてみたい。

右の図は、C児童館が発行する広報誌の一部である。このように、筆者のゼミ3年生5名は、7月ごろから数回施設に足を運び、スタッフから指導を受けながら企画を準備し、



11月15日に実施した。当日は13組26名の親子が参加し、歓声が上がするなど大好評のうちに終えることができ、現地スタッフからも合格点という評価をいただいた。尚、実施後に学生5名に対して企画の開発、広報活動、準備、運営、反省という一連の経験を通して得た成果と課題に関するアンケートを記入させ、集計した結果は以下の通りである。

表 2 (4) - 2 項目別自己評価の平均値

項 目	平均 (最高5~最低1)
目的意識の明確化	3.4
積極的な取り組み姿勢	2.8
メンバーとの協調性	3.8
対象者との関わり	3.2
企画後の成功感	4.4
自分の成長感	3.4

表 2(4)－3 学習成果の内容についての自由記述

<p>1. 学習内容</p> <p>企画前にリハーサル・シュミレーションすることの重要性(2)</p> <p>企画内容をメンバー間で共有すること</p> <p>子どもの年齢等による能力(できること)の違い(2)</p> <p>幼児期における遊びのポイント(2)</p> <p>幼児期のあそびの展開における保護者(大人)の役割</p> <p>子どもが楽しめるように自分が楽しむこと</p> <p>企画を進行するためのポイント</p> <p>進行時間把握と状況把握の大切さ</p>
--

表 2(4)－4 体験を通して気づいた課題に関する自由記述

<p>2. 気づいた課題</p> <p>描画・絵画力(2)</p> <p>子どもの流行についていけるようにする</p> <p>子どもや保護者への声掛け・説明(4)</p> <p>子どもとのコミュニケーション</p> <p>積極性</p>
--

表 2(4)－2 の項目別自己評価から、得られた「成功感」や「メンバーとの協調性」は自己評価が高い反面「積極的な取り組み姿勢」や「対象者との関わり」に関しての自己評価は低かった。この点は、表 2(4)－4 の気づいた課題に関して 4 名が「子どもや保護者への声掛け・説明」と記述し、「コミュニケーション」や「積極性」に関する記述も含めて学生自身が課題を認識する機会となっていることを示している。また、表 2(4)－3 の記述から、子どもの発達段階やあそび方、子どもへ関わる姿勢、企画実施のための準備や方法など保育者としての技術や資質向上につながる幅広い学習成果が得られており、成功体験を含めた成果につながったといえる。

(伊藤龍仁)

3. 試行の成果と今後の課題

(1) 成果

1) 新たな視点の獲得

学生は、保育士や教師の仕事について、これまで見過ごしていたことに気づき、意識的に見ることができるようになる。例えば、授業における子供に対する声かけの工夫、入念な事前準備の重要性、安全性の確保など、教える側から見るができるようになる。また個人としての仕事だけでなく、教員同士のチームワークの重要性も分かるようになる。さらに、学生は、いろいろな所に行くことで、自らのキャリア・デザインを見直すこともできる。正規の実習と違って、浅く広く見渡せる。独自方針の保育所や幼稚園があったりして、自分に合った所を見つけようとする視点を得られる。また、小学校希望の学生であっても、保育所や施設に行くことで幅広い経験を積むことができる。このように、多様な視点を得る貴重な機会となっている。

2) 主体的に行動する学生の育成

ボランティア活動を重ねている学生は、教員から指示されなくても、自分で考え、行動するように努めるようになる。最初は義務的に参加していた学生も、実践と振り返りを通じて各自の活動を見つめ直し、自分自身にとっても有意義なものになっていることに気づくようになっていく。また、現場で学んだ物の見かた考えかたを他の場面にも応用できるようになり、自分がどう動けばよいか考える習慣もついてくる。このように、指示待ち症候群から抜け出し、先を読んで行動する学生が育ちつつある。

3) 学生相互の学び

この活動によって、学生は学外に出て保育・教育現場を目の当たりにし、大いに刺激を受けている。そしてそこで得られた感動をボランティア発表会（「基礎演習」の一部）で他の学生にも広め、学びを共有している。このように、自発的に動き、学んできたことを交流することで、互いに高め合うことのできる集団ができていく。

4) 保育・教育実習への準備

これまで、最初に実習に出る2年生はトラブルを抱えることが多かった。学年が上がると徐々に減ってくるものの、最初の実習がいかにハードルが高いかが分かる。そのハードルを少しでも下げするために、このサービス・ラーニングの効果が期待される。保育・教育現場を身近に感じることで、仕事のイメージがわき、自分自身の課題も把握でき、日々の大学生活を充実させることができる。保育・教育実習へのソフト・ランディングである。

(2) 課題

1) 参加への意欲喚起

学生の中には、どうしても学外実習に関心が薄く、全く参加しない者がいる。その理由として、学外実習を始めるには敷居が高いことが考えられる。いかにそういう学生を引き込むかが一番の課題である。しかし、そういう学生も、大学祭のボランティアや学内の行事には参加していることがある。いきなり、教育現場に足を運ぶには抵抗がある場合も、まずは身内のボランティアからという考えで、動くことができる。同期の学生がやるボランティア発表会のような、彼らを触発する機会をより充実させたい。

また、学外実習は名東区内が中心なので、大学からそんなに遠くなく、気軽に行くことができる。さらに、大学で10台の自転車を購入してもらい、借用できるようになり、利便性が高まっている。このようなハード面の充実も引き続き取り組みが必要であろう。

2) 受入れ側の理解

サービス・ラーニングの実施には、受入れ側の協力が大前提となる。2015年度から教育学部の定員が増える。それに伴い、サービス・ラーニングをしたいという学生が増加することが予想される。受入れ側を増やす必要があるが、そのためにも、大学側と受入れ側の双方が地域連携の意義を再認識し、両者にとって有益な取り組みとなるように努めていかなければならない。

3) 科目化

サービス・ラーニングの成果が、大学の教職員に評価され、皆の理解が得られてきた。サービス・ラーニングを正規の授業にしようという方向で大学全体が動いている。正規の授業に格上げされると、非常に動きやすくなり、全員がサービス・ラーニングを体験できるようになる。その早期の実現が望まれる。

4) 空き時間の確保

学生にとって、まとまった空き時間がなければ、学外の活動に出て行くことはできない。また、受入れ側の小学校などから「5、6人の学生をお願いしたい」という要望があることがある。そのときは、同時に複数の学生が空き時間を確保せねばならず、さらに難しくなる。サービス・ラーニングが正規の授業になると、ある程度は解決するが、すべてのサービス・ラーニングが正規の授業になるわけではないので、空き時間の確保方法は課題として残る。

5) 社会人としての自己管理

学生は大学内では座っていることが多いが、教育現場に行くと、ずっと立ちっぱなしになる。教育実習に行く前に、まずは基礎体力を付けること、日々の生活を規則正しくし、遅刻をなくし、健康に過ごすことから始める必要がある。まずは、社会人としての最低限の自己管理が徹底されていないなければならない。

(柿原聖治)

【謝辞】 2014年度にわが教育学部初めてのサービス・ラーニングを予想以上に推進でき、この実践報告をまとめられるのも、名東区を中心に名古屋市内の小学校・幼稚園・保育所・児童厚生施設等の全面的なご協力をいただいたおかげである。記して、深くお礼申し上げます。

【注】

- (1) Barbara Jacoby, *Service-Learning Essentials*, Jossey-bass, 2015, chap.1
- (2) デューイ『経験と教育』市村尚久訳、講談社学術文庫、2004年(原著1938)
- (3) 日本教育方法学会編『日本の授業研究』<上・下>、学文社、2009年。日本教育方法学会編『教育方法43 授業研究と校内研修－教師の成長と学校づくりのために』図書文化、2014年、等を参照。
- (4) 唐木清志『子どもの社会参加と社会科教育－日本型サービスラーニングの構想－』東洋館出版社、2008年。唐木清志「社会科にサービス・ラーニングを導入する意義」『社会科研究』第70号、2009年等を参照。
- (5) 当初の想定とは異なり、実際には小学校での運動会や学芸会等のお手伝い等に保育士を目指す幼児教育コースの学生が多数参加した。
- (6) 児童福祉法の相次ぐ改正によって児童福祉施設の再編がすすんでいる。これは2014年現在の児童福祉施設に当てはめた数である。
- (7) 名古屋短期大学(代表)、桜花学園大学、名古屋柳城短期大学、岡崎女子大学、岡崎女子短期大学の5大学と愛知県教育委員会・愛知県健康福祉部・愛知県私立幼稚園連盟・愛知県私立保育園連盟・愛知県保育士会が連携し、平成24年度文部科学省「大学間連携共同教育推進事業」として採択された事業であり、保育者養成の「充実と発展」や「保育の質保証」に取り組んでいる。「文

部科学省・大学間連携共同教育推進事業 保育コンソーシアムあいち」(2015)

<http://www.nagoyacollege.ac.jp/hca/index.html>.

- (8) 岡田泰子他 (2010) 「「あそびすと」養成講座の成果について」『中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要』(11) 中部学院大学・中部学院大学短期大学部, 184-192.
- (9) 武田直樹 (2011) 「日本の大学教育におけるサービスラーニングコーディネーターの現状と課題」『筑波学院大学紀要』(6) 筑波学院大学, 119-131.
- (10) A児童館のU.S.とは児童館が募集した中学生を対象とするユーススタッフを意味しており、有償ボランティアと位置づけられる。本学子ども発達学科3年生が1月に新規採用された。

受理日 平成27年3月31日